

令和7年度 広島・沖縄平和派遣者報告書



船 橋 市

目 次

1. はじめに	1
2. 平和都市宣言文	2
3. 派遣スケジュール・行程表	3
4. 派遣者名簿	4
5. 派遣場所の報告 広島	6
6. 派遣場所の報告 沖縄	14
7. 派遣者の報告（感想文） 広島	19
8. 派遣者の報告（感想文） 沖縄	30
9. 事前説明会及び市長報告会の様子	41
10. 平和記念式典報告	42
11. 対馬丸記念館講話報告	44
12. 平和記念式典式次第	46
13. 広島平和宣言	47

は じ め に

昭和20年8月6日に広島、9日には長崎に世界で初めて原子爆弾という兵器が使われ、多くの尊い生命が一瞬のうちに奪われました。あの日から80年が過ぎました。

いま、戦争体験、被爆体験をされた方が少なくなっていく中で、戦争や原爆の悲惨さ、世界の恒久平和がいかに大切かということを、次世代にどう伝えていくかが大きな課題になっています。

船橋市は、昭和61年12月に、世界の恒久平和を願うとともに、核兵器の廃絶を目指して「平和都市宣言」を行いました。これを機に、毎年、平和の集いや平和写真展、そして広島や長崎で行われる平和式典への市民の派遣などの事業を通して、市民の皆様と一緒に平和の尊さについて考える機会を作るという取り組みを行なっています。

平成5年から始めたこの平和派遣事業も今回で31回目となりました。今年は戦後80年という節目の年であることから、例年派遣している広島への6人に加え、凄惨な地上戦が行われた沖縄にも5人の派遣者を送り出しました。

この11人を含めて、これまで延べ291人の市民を派遣してきました。

この報告書は、今回広島・沖縄へ派遣されたこれからの船橋を担っていただく若い世代の皆さんが、現地で実際に肌で感じた貴重な体験を取りまとめたものです。市民の皆様には是非御覧いただき、平和の尊さ、戦争の悲惨さについて語り合ってくださいことで、平和派遣事業の意義はさらに深まるものと考えています。

船 橋 市

平和都市宣言

船橋市は、現在人口五十一万を擁する首都圏有数の中核都市に成長し、第二の飛躍期を迎えている。そして、「活力ある近代的都市」を市政の目標に掲げ、より豊かな福祉社会実現のため懸命な努力を続けているところである。

しかし、郷土船橋の限らない繁栄は、日本の安全と世界の恒久平和なくしては望み得ないものである。

私たち船橋市民は、世界の恒久平和を願い、我が国の国是である非核三原則を遵守し、平和を脅かす核兵器の廃絶を目指して最大の努力を払うことを決意し、ここに「平和都市」を宣言する。

昭和六十一年十二月十九日

船橋市

《派遣事業スケジュール》

4月	派遣者公募
7月23日	説明会（行程説明・自己紹介等）
7月28日～30日	沖縄派遣
8月5日～7日	広島派遣
8月21日	市長報告会及び平和派遣者報告準備
10月5日	平和派遣者報告（「平和の集い」において）
1月	報告書 完成・公表

《派遣行程表》

～広島～

8月5日 (火)	JR 船橋駅（集合）－東京駅－広島駅－現場学習（平和記念公園など）－ホテル
8月6日 (水)	ホテル－平和式典（平和公園）－広島原爆死没者追悼祈念館－被爆体験講話－広島平和記念資料館－灯籠流し－ホテル
8月7日 (木)	ホテル－本川小学校－広島城－広島駅－東京駅－JR 船橋駅（解散）

～沖縄～

7月28日 (月)	JR 船橋駅（集合）－羽田空港－那覇空港－旧海軍司令部壕－ －糸数アブチラガマ-ホテル
7月29日 (火)	ホテル－対馬丸記念館（語り部による講話）－ －ひめゆりの塔・ひめゆり平和祈念資料館－ －沖縄県平和祈念公園・沖縄県平和祈念資料館・沖縄平和祈念堂－ －ホテル
7月30日 (水)	ホテル－国際通り－旧崇元寺第一門及び石牆－那覇空港－羽田空港－ －JR 船橋駅（解散）

《派遣者名簿》

～広島～

	氏名	性別	学年等	担当
1	やぎ ののか 八木 希佳	女	中学3年生	班長
2	やました ともや 山下 智也	男	中学2年生	副班長
3	やまもと あやな 山本 彩菜	女	中学1年生	報告書担当
4	おおの りおな 大野 里桜奈	女	中学3年生	平和式典報告担当
5	いしかわ たまき 石川 珠姫	女	中学2年生	写真担当
6	ひらやま あきら 平山 晃	男	原爆被爆者の会	

～沖縄～

	氏名	性別	学年等	担当
1	<small>かわかみ</small> 川上 <small>みさき</small> 美咲希	女	中学2年生	班長
2	<small>たかまさ</small> 賞雅 <small>りん</small> 如倫	女	中学3年生	副班長
3	<small>いのうえ</small> 井上 <small>ゆう</small> 優	女	中学2年生	報告書担当
4	<small>とんしょ</small> 頓所 <small>ひろみ</small> 寛己	男	中学2年生	講話担当
5	<small>やまざき</small> 山崎 <small>めい</small> 芽衣	女	中学1年生	写真担当



(令和7年10月5日 船橋市民文化ホールにて)

《派遣場所の報告》

～広島～

原爆ドーム



爆心地から約 160mに位置している人類史上初めて使用された核兵器により被爆した数少ない建物の一つで、核兵器廃絶と人類の平和への誓いのシンボルとして世界遺産にも登録されています。元広島県産業奨励館で、そこでは物産品を展示、販売していました。落とされた原爆により全壊はまぬがれたものの一部を残し、倒壊しました。

原爆ドームの保全については、原爆の恐ろしさを後世に伝えるために、原爆ドームを残すべきだという意見や、この建物が残るといつまでも原爆のことを忘れられず、トラウマを思い出してしまうから、残したくないという意見で分かれていましたが、長い議論の末、残すことになり、その結果、今私たちが見学できていることに感謝しています。

原爆の子の像

幼いころに被爆し、12歳で白血病のため亡くなった佐々木禎子さんをきっかけに、原爆で亡くなった子の霊を慰めるために建てられた像です。

この像は禎子さんが亡くなって3年後の1958年5月5日に除幕式が行われました。建立を呼びかけたのは禎子さんの同級生たちでした。

石碑の上には女の子が両手を広げ、平和の象徴である鶴を掲げています。像の真下にある石碑には「これはぼくらの叫びです これは私たちの祈りです 世界に平和をきずくため」と刻まれています。像の周りには世界中から千羽鶴が捧げられ、まさに人々の平和への祈りを強く感じる場所になっています。

この像には「明るい希望」という意味が込められています。



被爆した墓石



強烈な爆風で境内にあったたくさんの墓石も吹き飛ばされ散乱しました。被爆当時の姿で残されているこの墓(爆心地から約270m)は、広島藩浅野家年寄の岡本宮内のものです。

平和記念公園は盛り土をして整地して造られたため、墓石周辺を石で囲み、公園内でこの箇所だけは被爆当時の地面を

そのまま残しています。

爆風が吹いただけで墓石が崩れるなんてそれだけの威力があるということに驚きました。

盛り土をした箇所と高さが違うことから、当時の地面の高さが分かり、現実感がありました。

韓国人原爆犠牲者慰霊碑

戦時中の労働力を補うため、多くの朝鮮人が日本で働かされ、敗戦時には日本には約 300 万人の朝鮮人がおり、数万人が広島市内で被爆したと言われています。

普通に過ごしていただけの韓国人が異国の地で犠牲になったということが、戦争の非惨さを物語っており、とても悲しく思いました。



平和の鐘



現在設置されている平和の鐘は、1964 年 9 月 20 日、原爆被災者広島悲願結晶の会により建立されました。

制作は故香取正彦さんです。平和記念公園北側にあり、西側の道向かいには原爆供養塔があります。

4 本の柱で支えられたコンクリート製のドーム型の屋根の下に梵鐘が下げられ

ています。

鐘の表面には、国境のない世界地図が浮き彫りにされ、撞座には原水爆禁止の思いを込め原子力のマークが、その反対側にはつく人の己の心を映し出す丸い鏡が表現されています。

「国境のない世界地図のように人々の心が繋がって欲しい」という願いを、鐘の音に乗せて世界に届けるように心を込めて鐘をつきました。

レストハウス

爆心地から 170mのところにあった建物は地下室を除いて全焼しました。

しかし爆心地側に開口部のほとんどない強固な建物だったためか、基本的形態はとどめられていました。

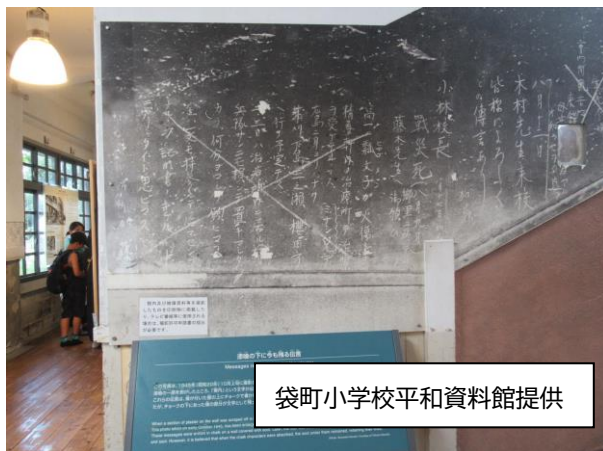
被爆当時、この建物には 37 人が勤務していましたが、たまたま地下に書類を取りに下りていた 1 人を除いて全員亡くなりました。



一瞬の行動の違いが生死を分けたことに、人生の、戦争の残酷さを感じました。

現在最上階は売店や休憩室になっており、現在と過去が同じ場所に存在している貴重な建物でした。

袋町小学校



爆心地から約 460mに位置する、被爆当時は避難所や救護所の役割だった元小学校。

木造校舎はすべて倒壊・全焼し、唯一の鉄筋校舎は外郭のみを残し、消失しました。窓枠も吹き飛ばされたり、湾曲したりしました。

朝礼を終えたばかりの教職員、児童ら約 160 人が直撃を

受け、生き残ったのは数人だけでした。

この小学校の壁には、消息を知らせる多くの伝言が残されています。

老朽化が進んだため、取り壊されましたが、被爆した校舎の一部を残し、現在は袋町小学校平和資料館として残しています。

広島平和記念資料館



(広島平和記念資料館 寄贈者 新田 英明 塚本 ハナヨ)

原子爆弾による被害の実相を世界中の人々に伝え、ヒロシマの心である核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に寄与することを目的に、1955年に開館しました。

被爆者の遺品や被爆の惨状を示す写真や資料の収集展示するとともに、広島市の被爆前後の歩みや核時代の状況等について紹介しています。

資料館の中には原爆の被害を受けた生々しい写真や遺品の数々がありました。

原爆の被害を受けた人々の絵が飾られており、それを見て原爆はこんなにも多くの人をこのような状況に陥れてしまう物なのだと思います。資料館には時計が展示されていて、どれも8時15分で止まっています。

また資料館では、被爆者による被爆者体験講話等も実施しているほか、平和学習のための資料の貸し出しも行っています。

海外の人にもたくさん来ていてとても熱心に展示を見ている姿が印象的でした。

世界平和を願う心は、世界共通だと感じました。

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館

原爆死没者を追悼し、その惨禍を後世に伝えていくための施設です。被爆者の記憶や思いを共有し、次の世代へ引き継いでいくために、被爆体験記や原爆詩の朗読会を開催しています。

朗読者はボランティアで、フリーアナウンサーや劇団員またはその経験者などがいらっしゃいます。

起こったことを詩に表しそれを自ら口に出して読むことでその場の情景がより頭に浮かびました。悲しい気持ちでいっぱいになりました。

被爆遺構展示館

被爆の実相を直接見て肌で感じられるように原子爆弾による被害の痕跡が残る住居跡やアスファルト舗装された道路跡などの露出展示をしています。

被爆当時の町並みの遺構を通じ、平和記念公園を訪れる人々に、「この地」にはかつて多くの人が暮らす町があったこと、そして「この地」に暮らしていた人々の日常がたった 1 発の原子爆弾により一瞬にして失われてしまったこと、そして被爆後の先人たちのたゆまぬ努力により「この地」が平和の象徴としての公園として整備され、平和で美しい町として復興を遂げたことを見ることが出来ます。

頑丈な建物までもが崩れ落ちており、すべてがとても痛々しく感じました。

露出展示されていることで、当時の空間がそのまま残っていました。



灯ろう流し



戦後まもなく、原爆で命を落とした人々の遺族らの手作りで始まったのが由来です。

夕刻から元安川に漂う幻想的な灯かりは、被爆者の霊を慰めるとともに、今を生きる平和への願いを強くさせています。

原爆の残り火を採取して継承させており、誰でも気軽に参加できる慰霊行事となっています。

川面に灯ろうの明かりが映りとても綺麗で儂く感じました。

たくさんの灯ろうは、平和を思う沢山の人々を連想させ、その気持ちを川から海へ、そして世界へと優しく伝えてくれるようでした。

本川小学校

爆心地から 410mで被爆し、その後幾度か補修・改修され、1988 年に平和資料館として開館されました。

被爆した校舎の歴史を記した年表に注目すると、学校の授業が昭和 21 年(1946年)2月23日に再開されていました。

被爆の実相を後生に伝えるため、原爆の被害を受けた校舎の一部がそのまま保存されており、この建物自体が戦争の悲惨さと平和の大切さを直接訴えています。かつての教師が被爆地から集めた展示品などを見学することができます。

また、漫画「はだしのゲン」の舞台となった小学校でもあります。

楽しく通っていたはずの小学校での被爆。原爆が投下された 8 時 15 分を指したまま止まっている婦人時計を見ました。地下室まで激しく焼けた跡があり、改めて原爆の残酷さを感じました。



本川小学校平和資料館提供

広島城



原爆投下で一瞬にして原型がわからないほどに倒壊してしまいました。

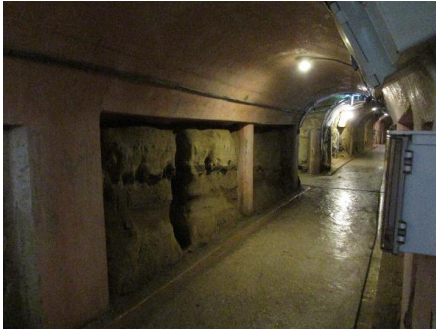
1958 年に開催された広島復興大博覧会に合わせて、天守が鉄筋コンクリートで再建されました。

現在の天守は博物館となっており、広島城の歴史や城下町の様子、浅野家に伝わる武具などが展示されています。

再建に至るまでの経緯を知ること
で、保存一つとってもいろんな考えがあり、様々な思いがあることを知りました。

～沖縄～

旧海軍司令部壕



太平洋戦争の沖縄戦で大日本帝国の司令部として使用されていた防空壕です。沖縄県豊見城市に位置します。1944 年 8 月 10 日に着工され本格的に工事を始めたのは 10 月 10 日の十・十空襲以降でした。作戦室、幕僚室、司令官室、暗号室、医療室、発電機室等が当時のまま残されています。当時、中には 4000 人ほどの人がいて、廊下にまで人がぎゅうぎゅう詰めだったそうです。場所がなかなか無かったためか、寝る時は立っていたそうです。ピッケルのようなもので地道に壕を掘ったため、壁にはその跡が残っていました。ひんやりとして少し古い空気が漂い、湿度が高いので結露が多くありました。集団自決の際の手りゅう弾の跡もそのまま残されていました。ここで立てこもった海軍部隊はどのような気持ちだったのか考えさせられました。

糸数アブチラガマ

沖縄県南城市玉城字糸数にある自然洞窟です。食糧、衣服倉庫、手術室、発電機室など様々な部屋がありました。もとは、糸数集落の避難指定壕でした。その後、日本軍の陣地壕や倉庫として使用され、戦場が南下するにつれ南風原陸軍病院の分室となりました。実際に訪れ、この場所で私たちと同じくらいの年齢



のひめゆり学徒たちが遺体の処理や怪我人の手術など、想像を絶する体験をしていたという現実を目の当たりにしました。真っ暗なガマの中で、毎日糞尿の入った一斗缶を外へ運んだこと、運ぶ途中で足を滑らせ全身に糞尿を浴びることもあったこと、負傷した兵士の身体にわいたうじ虫をピンセットでつまみとったこと、死体が積み重なっていたことなど、どの話も強烈に記憶に残っています。それでもガマの中は安全だからとみんな入りたがっていたそうです。このことから戦争の悲惨さが十分過ぎるほど伝わりました。

対馬丸記念館



沖縄県那覇市若狭にある 1944 年の対馬丸事件についての資料が保存された施設です。記念館完成前の 2003 年 3 月時点では 100 人以上の遺影が収集され、7 組の生存者の証言が残されています。語り部の方に講話をしていただきました。なぜ対馬丸事件が起きてしまったのか、残された家族の思い等を詳しく教えていただきました。

対馬丸は軍艦船だから安全で、長崎への疎開だと言って、先生たちが家族を説得し乗船させました。しかし実際は、軍艦船ではなく貨物船で、沖縄にいる子供や老人など戦力外の人たちを外へ運び出すことが目的でした。そのため、犠牲になることを前提に疎開させたそうです。結果、疎开学童を多く乗せた対馬丸はアメリカの魚雷攻撃により沈没し、犠牲者が増えることになってしまいました。沖縄戦では、疎開児童を含め子供の犠牲者がとても多かったのが特徴です。遺族の方は辛い過去を経験しながらも「悲しいけど夢や希望をもって平和な未来をつくって欲しい」と願ってくださっています。

ひめゆり平和祈念資料館



沖縄戦でのひめゆり学徒隊たちに関する資料やビデオが展示されています。証言映像や当時の写真、壕の実物大模型などを通して、ひめゆり学徒隊が体験した沖縄戦の実像を知ることが出来ました。資料館に入ったすぐのところに、沖縄師範学校女子部と沖縄県立第一高等女学校の当時の生徒たちの様子が展示されていました。部活動の種類や写真、先生たちのあだ名などが載っていて当時の学校生活の様子が鮮明に目に浮かぶようでした。戦争初期の頃は、看護実習が始まったくらいで、まだ本当に戦争が始まるなんて思いもせず、和気あいあいと学校生活を楽しんでいたそうです。ですが平和は永遠には続きませんでした。順路を進むと展示はだんだんと戦争の色に染まっていきました。戦争によって“当たり前”が簡単に壊されてしまったのです。髪型は学年指定になり、長引く戦争による物資不足の影響で制服が全国統一の質素なものになりました。戦争中のひめゆり学徒隊の陸軍病院での活動は、糸数アブチラガマでの活動と同様に悲惨なものでした。最後の方の展示に、ひめゆり学徒隊の方々の遺影と名前がありました。遺影を見ると確かに実在していたことが思い知らされ、その家族やそこにあった日常が想像でき辛い気持ちになりました。

沖縄県平和祈念公園



沖縄戦終焉の地である沖縄県糸満市摩文仁を南に望み、南東側に美しい海岸線を眺めることができる公園です。沖縄の風土と歴史の中で培われた「平和のこころ」を感じることができます。1995年に除幕された「平和の礎」には、国籍や軍人、非軍人を問わず、沖縄戦で戦死した全犠牲者23万8千人あまりの氏

名が刻まれています。快晴の天気でしたが、海は濃く深い青色で、流れが激しくいまにも飲み込まれそうな断崖が印象的でした。どこまでも続く広大な海を目の前にすると、ここが沖縄戦終焉の地であることを実感します。

沖縄県平和祈念資料館

沖縄県糸満市摩文仁にある沖縄戦に関する様々な資料を展示している施設です。主に、戦争の残酷さと平和の尊さを伝えています。ミニチュアの射撃練習の様子などが展示されていました。展示物に、日本兵とアメリカ兵の戦力の比は1:4だと書かれていて、対等な戦争ではなかったのだと感じました。また、当時日本の植民地であっ



た朝鮮から強制連行され1万人あまりの朝鮮人が犠牲になったということを知りました。戦争の被害というのはとても大きく、違う国の方まで巻き込んでいたのかと驚きました。沖縄戦の最大の特徴は、正規軍人よりも一般住民の犠牲者の方がはるかに多かったことも書かれていて、沖縄戦の現実を知り、やりきれない気持ちになりました。

沖縄県平和祈念堂



平和祈念公園内にある平和の尊さを訴える平和の殿堂です。講堂の奥に、世界に平和を訴えかけるモニュメントがあります。入り口近くの壁面には20点の連作絵画「戦争と平和」が展示されています。沖縄戦は海との関わりが深いです。海で犠牲になられた方も多く、そのためか海をモチーフにした絵画がたくさんありました。沖縄の海は美しいだけでなく、戦争犠牲者の方々が眠っている尊い場所でもあるのだと強く感じました。祈念堂には蝶園も併設されて

いて、たくさんのオオゴマダラが舞っていました。蝶園で育った「蝶＝魂」が戦争犠牲者を追悼し、平和を願う訪問者を出迎えてくれます。

旧崇元寺第一門及び石牆^{せきしょう}

沖縄県那覇市にある仏教寺院です。1945年沖縄戦により焼失しました。歴史あるアーチ型の石造りの門をくぐった時、昔にさかのぼっ



たような不思議な気分になりました。石門を超えると2本の大きなガジュマルの木がそびえ立っていて、威厳と貫禄がありました。その少し奥には焼失前の崇元寺の建物を再現したジオラマがありました。ジオラマと現在の姿を見比べると、建物は一つも残っていませんでした。とても立派なお寺だったように感じたのですが、それさえも全て消し去ってしまう戦争の恐ろしさを感じ、やるせない気持ちが込み上げてきました。

《派遣者の報告（感想文）》

～広島～



広島で見た原爆の真実

八木 希佳（中学3年生）

私は今まで原爆は危険なもの、よくないものと認識しているだけで、具体的にどのくらい危険なものでどんな被害があったのか詳しく知りませんでした。今回、船橋市の平和派遣事業に参加させてもらい、3日間広島に滞在し“あの日立ち上るきのこ雲の下で何があったのか”原爆の実相を知りました。それは私の認識や想像をはるかに超えるとても悲惨なものでした。

私は、現在93歳の被爆者の方に直接お話を聞くことができました。原爆投下直後に広島市内に入ったその方は、仲間の無事を確認するために火の海となった道なき道を必死に走ったそうです。その時、自分の下にあるものは、がれきなのか人間なのか区別がつかないほど地獄のような光景だったそうです。お話を聞きながら当時の光景が頭に浮かび現実とは思えないその内容に、私は涙が止まりませんでした。さらに600ミリシーベルトもの放射線を浴びたその方は、今年6度目のがんを発症しているということでした。戦争が終わってもなお原爆の被害に生涯苦しみ続けている被爆者にとっても心が痛みました。その方が何度も繰り返し言っていた「原爆の本当の恐ろしさを知ってほしい」という言葉がとても印象に残っています。

たった1発の原爆が多くの命を奪い、人々の人生を変えてしまいました。この恐ろしい原爆を保有している国は現在9か国で、合計約12,000発以上もあります。広島の実相を知った今、この数字はとても恐ろしく、人類にとっての脅威と言えます。本当に核を保有することは正しいのか、自分の国のことだけを考えるのではなく、それがもたらす影響について保有国には今一度考えてみてほしいです。

原爆が投下されて80年。被爆者の平均年齢は86.1歳となり、日本人の多くは戦争を知らない世代になりました。被爆者の方々が語らなければ忘れられてしまうことのないように、私たちが世代を超えて原爆の真実を伝え続けていかなければならないと思います。そして教科書だけでは知ることの出来ない、さらなる真実が広島にはあります。ぜひ、世界中のたくさんの人に、特にこれか

らの未来を担う若い世代に広島を訪れてほしいと思います。

私は今回の派遣で、さらに平和への思いが強くなりました。唯一の被爆国である日本の国民として、被爆者の体験や思いを無駄にしないように使命感を持って伝え続けていきたいと思います。もう二度と核の被害を生まないために。私達が平和のためにできることを一つ一つやっていきたいです。



3日間を通して

山下 智也（中学2年生）

この事業は母が、昔から原爆に興味があった私のために見つけてくれ、応募してみたらと背中を押してくれた。この事業に応募するために、作文を書く必要があったのだが、作文を書くうちに初めて、自分は本で得た知識があるだけで、平和の尊さ、原爆の本当の恐ろしさを理解していないということに気がつけた。そして、この事業に向きあって作文を書くと、ありがたいことに平和派遣に参加できることができた。

広島に行って、1日目。はじめに平和記念公園に向かった。平和記念公園をまわっていくと、平和の鐘や韓国人原爆犠牲者慰霊碑、平和の泉・原爆の子の像などのさまざまな建造物に出会った。その中に、平和の灯火というものがあった。これは、手のひらを広げたような形で、その中央に火が灯っている。その火は、強風の日でも大雨の日でも決して消えない。核兵器がこの世界から消えるまで絶対に消えないそうだ。あの日見た火の力強さはまだずっと私の心に残っている。

2日目の午前中に平和式典に参加した。式典では、参加者一人一人が平和への思いをもって参加をしていた。私にとって、人がたくさん集まるものといえば運動会や文化祭などが真っ先に思い浮かぶ。そのため、今回の平和式典の様子は私にはすごく衝撃的だった。その後、灯籠に自分の願いを書き、袋町小学校に行った。袋町小学校では、知り合いの安否をもとめて壁に書かれたたくさんのメッセージを見て、必死さや希望を感じ取れた。午後の平和記念資料館では、すごく衝撃的な資料や映像がたくさんあった。その中には、ものすごく残酷な写真もたくさんあった。しかし、その前に聞いた被爆者のおじいさんの話がずっと頭に残っている。原爆に残酷すぎるということはない。私はすごく衝撃的な資料を何点も見ても、少し気疲れしてしまったが、それでよかったと思う。なぜなら本などの文章だけで得た情報だと、あまり頭に残らず、原爆の本当の残酷さやえげつなさを知ることができないからだ。そのため、平和祈念館にいった経験は私にとってはすごく貴重だった。そして、夜の灯籠流しに行った。灯籠流しはすごく幻想的だった。風の影響で灯籠が川岸に流れていってしまったが、とても綺麗だった。無数の灯籠一つ一つに平和の思いが書かれていると思うと、人類の一体感を感じ、すごく感慨深かった。

3 日目に行った本川小学校の地下には、被爆後の広島街のジオラマがあった。ジオラマでは、本で得る情報よりももっと細かく、詳しい情報を読み取ることができた。

この 3 日間、本当に参加して良かったと思う。広島原爆という概念に興味があっただけの私に、平和の尊さ・戦争の悲惨さを理解するきっかけを与えてくれたからだ。今でもなお、世界では核を所有している国々がまだまだある。日本は唯一の被爆国であるのにもかかわらず、未来を担う世代の人々は、かつての私のように、原爆が落ちたという事実を知っているだけの人が多いように感じる。原爆、戦争で苦しんだ人たちのためにも、平和の大切さを知った人たちが行動して、日本だけでなく世界に平和の大切さを伝える行動をしていくべきだ。平和の灯火を私達で消すために。



今後は

山本 彩菜（中学1年生）

1945年、8月6日午前8時15分、この時に広島で起きた出来事を、知っている人は少なくなっています。私もこの派遣事業に参加する前は、その1人でした。広島に原爆が落とされて80年、被爆者の高齢化により、直接語り継ぐ人が少なくなっているのが現実です。今回の派遣で私は93歳の方の話を聞くことができました。その方は私たちに、必死に原爆の恐ろしさ、原爆によって生活が変わってしまったことを教えてくださいました。「語り継がなければ、人は同じ過ちを繰り返す。」と言っていました。必死に訴える姿が忘れられません。

平和記念式典に参加しました。こども代表が「いつかは訪れる、被爆者のいない世界。同じ過ちを繰り返さないために、多くの人が事実を知る必要があります。」と言っていました。時は流れ続けます。93歳の方もいつまで語り継いでいられるかわかりません。93歳の方が伝えられなくなっても、話を聞いた私達が語り継いで、同じ過ちを繰り返してはいないと思いました。

原爆ドームを残すか、残さないかで、討論になった事を知りました。原爆ドームがあると、いつまでも原爆のことを思い出してしまうから残したくないという人と、原爆の恐ろしさを、後世に語り継ぐために、原爆ドームは残すべきだという人がいたそうです。たくさんの意見の中、こうやって残してくださった事に、私は感謝しています。残してくれたことによって、私達も、次の世代も、1945年8月6日午前8時15分に起きた出来事を知ることができます。今後は、生の声は聞けなくなりますが、資料や建物などで戦争について知っていかなければいけないと思いました。



戦後 80 年 体験談の貴重さ

大野 里桜奈（中学 3 年生）

私はこの広島への派遣事業で、核兵器や戦争に対する生理的な不快感を感じるとともに、私達が戦争について正しく知り、伝えなければならないという使命感に掻き立てられました。

まず 1 日目は原爆ドームに訪問しました。戦前の原爆ドームは華やかな商業施設だったそうで、手前に流れている川で様々なものを運び入れ、夜にはライトアップされていたという写真も見せてもらいました。もちろん、窓がなく、錆びて今にも壊れそうな原爆ドームに痛ましさは感じましたが、有名な観光施設であるということや、周辺の近代的なビル街のせいか、このときはまだ、語り手の人が一生懸命伝えてくれている戦争の凄惨さに強い思いを抱くことはできていませんでした。また、その後回った平和記念公園の史跡も、痛ましい事実が脳に詰め込まれるものの、まだ実感に乏しいところがありました。

次の日は朝早くから平和式典がありました。式の始まりには地元の学生による演奏が聞こえてきました。式典は最初から最後まで厳かで、壇上に立ち献花や誓いを行う人々は、全員が慎ましい佇まいである一方、その言葉や目からは強い意志を感じました。特に参加者に学生や外国人が多かったのが印象に残っています。

続いて、今年で 93 歳になる被爆者の方のお話を伺いました。60 分間全ての内容がとても衝撃的であり、戦争そして原爆というものに対するこれまでの私の価値観をすべて塗り替えられる体験でした。

広島に原爆が落とされる可能性が知らされていたにも関わらず、私たちと同じ中学生の子供達がそれに備えるための作業に従事させられていたこと、そして、サイコロの大きさしかないウランの化学反応により、多くの生徒が太陽の表面温度なみの熱さに苦しみ、川に飛び込んで溺死してしまったことに非常に大きな悲しみと怒りを感じました。

また、特にお話のなかで伝えられた三つのセリフが強く心に残っています。一つ目は「人を殺せば褒められて、お金がもらえた」、二つ目は「先生が軍の人

に子供は広島から逃がすように頼んだけれど、『子も国のために働くべきだ。そうしなければ、非国民だ』と言われた」、三つ目は「亡くなった友達の母親に狂ったように『敵を討って』とせがまれた。」というものです。人間のむき出しの愚かさや理不尽が、当時はまだ年端もいかない、戦争に参加する判断も意思表示もできない子供であったこの方にも、当たり前のように向けられてしまうことが、とても残酷なことだと感じました。

何もできない無力さと絶望を生々しく語る被爆者の方に、「戦争」というたった 2 文字の言葉、普段私達が軽々しく扱っている言葉の裏側に隠れている無限の理不尽と底なしの残虐さ、辛さ、やるせなさに背筋が凍る思いをしました。

最後に、資料館を訪れました。資料館には、何十人もの遺品とその人々の最期が、鮮明に展示されていました。また、当時の写真もいくつかあったのですが、すぐに目をそらしてしまうほど残酷なものでした。ただ、意外にも被爆したことへの恨みを募らせる言葉よりも、最期まで気丈で生き続けたいという希望を捨てていなかった人が多いことについて、人の心の強さを感じるとともに、なお一層、痛ましさと原爆への怒りを感じました。

今回の派遣では特に被爆者の方のお話に大きな衝撃を受けました。被爆者の方が話の終わりにおっしゃっていた「戦争のことを『こんなものか』で済ませてしまうのが一番恐ろしい」という言葉が心にのしかかり離れません。これからは私達が戦争や核の恐ろしさを語る番です。歴史の記録や式典などは起きた事実を時間の経過とともに風化させないことに有効であると思います。しかし私が今回の派遣事業で感じたことは、実際にそれを体験された方の言葉の重みに勝るものはなく、被爆者の方々からお話を聞けるうちに聞くことが何よりも心に残り、今私達が最も大切にすべきことだと思いました。



派遣事業を通して

石川 珠姫(中学2年生)

1945年8月6日午前8時15分、島病院上空580mに1発の原爆が落とされ、その1発で今までの生活が一瞬で壊され、多くの尊い命が奪われました。今回の広島派遣は、その痛ましい事実を改めて深く考えさせられる、貴重な体験になりました。

私がこの派遣で一番心に残っていることは、広島平和記念資料館です。そこで見たものは、目を背けたくなるようなものばかりでした。「助けて」「水をください」動く気力のない母親にすぎる幼児、「目を開けて、目を開けて」子供の名前を叫び続ける半狂乱の母親。亡くなった人、生き残った人、一人ひとりの心からの叫びが、展示を見ていて聞こえて来るようでした。原爆が落とされ、辺りは焼け野原となり、今までの暮らしが一瞬にして消え、家族や友人を失った苦しみに耐え、放射線の影響で今もなお、後遺症に苦しめられている人が多くいます。原爆では、心と体に多くの傷を残しました。その事実を資料館で目の当たりにし、原爆の脅威を思い知りました。

今回、被爆者体験講和を聞く機会もありました。その方は、入市被爆者にもかかわらず、直接被爆者と同等の放射線を浴び、今では後遺症と見られる癌を6箇所も患っています。そのような中で原爆の実相を知ってほしいと、思い出したくもない記憶を語ってくださいました。お話していただいた中で印象に残っていることは、「想像を絶しろ」という言葉でした。人が想像するのには限度がある。しかし、原爆や戦争を知りたいのなら、自分の想像の更に上を考え、「これぐらい」で済ませてはならない。

今、世界には約12,000発の核爆弾があるそうです。ロシアのウクライナ侵攻で核が脅しとして使われていたりもします。そして、今もどこかで、戦争、紛争が続いています。もし、核戦争が始まってしまえば、人類は滅亡します。核兵器廃絶を実現させるためには、日本を最後の被爆国にし、核の恐ろしさ、不要だということを知ってもらう必要があります。「微力だけど、無力じゃない。」この言葉を胸に刻み、多くの人に原爆の恐ろしさを伝えるのが日本人の役目だと思います。



伝えてゆかねばならない真実

平山 晃（船橋市原爆被爆者の会）

高校 3 年の時、後輩の高校 2 年のお母さまから学校へ電話がありました。白血病で輸血以外では生存できず、1 日 500cc の血液を息子に献血してほしいということでした。衝撃でしたが事実でした。私は、全校生徒を体育館に集め、A 型血液を 1 人 1 回 100cc で 1 日 5 人を募りました。

しかし、まもなく彼は亡くなってしまいました。

被爆 2 世、16 年経ってから発病し、あっけなく亡くなりました。

成人した後、私達の同級生も白血病で亡くなっていたことが判りました。実際何人の同級生や後輩が白血病で亡くなったか、みんな怖くて調査する人は居ませんでした。

原爆投下で亡くなった方が沢山いて、その後、生き残った人は死との恐怖に怯え、ある時隠れていた死神がスット現れ、有無を言わず連れてゆきます。原爆は直後に助かったってダメなのです。

今回、講演会があり、新井俊一郎氏 93 歳の話聞く機会を得ました。今の広島大学附属中学 1 年 13 歳で爆心地から 3.5km に自宅がありました。当時、広島市の延焼を防ぐための幅 100m の道路をつくるため家屋を破壊している最中でした。約 8000 人の中学 1 年生が動員されていましたが、6300 人の生徒が原爆で殺されました。新井氏自身は食料を増産するための「農村動員挺身隊」として、20km ほど離れた今の東広島市に滞在していました。

新井さんは特別帰宅するため、友人と駅のホームにおり、自宅のある広島の方を見ていました。その時「ギラッと目がくらんで、広島方面の空が一瞬にして燃えた。ガーッと燃えて、緑色か紫色か、ブルー。いろんな色が混じった炎の輪が出来た。頭の上をその炎が来たと思ったら、全身、頭の上から叩かれたような感覚。気が付いたら頭の上から、ぎゅーんと 1 機だけ B29 がすれすれに飛んで逃げていった」そうです。すぐに、駅は大騒ぎになりましたが、列車は次の駅で停車しました。広島まで 15 キロの道のりを歩いたそうです。

その途中、午後 2 時頃、逃げてくる被爆者で埋め尽くされていた広島駅の近くの橋で、小学 1 年生くらいの女の子と 3 歳くらいの姉妹とすれ違いました。「裸

で、髪の毛はちりちり。顔は、風船みたいに膨れ上がって、目と鼻と口のところだけちょんちょんと引っ込んでいる。立ちすくんでいる私のすぐ右側を通り過ぎるときに、お姉ちゃんが『しっかりね、がんばってね』だったか。妹に言ったように思う。あのときの私の必死の思い。生きていて欲しいと思った。ただ見送るだけで、何もしてあげられなかった。これが、原爆の本当の状況です。こんなことがあってよろしいか」

当時、防火用に各所につくられていた水槽は、頭から突っ込んだ遺体でいっぱいになっていました。異様な光景の中でも、ただ必死に自宅を目指しました。

「われわれが踏みしだいて飛び越えた焼けぼっくいは、半分以上が人間だと思う。地獄のありさまをつぶさに見ました」どのようなルートをたどったのかは覚えておらず、夕方になって自宅に到着したそうです。

「誰かがあの時ちゃんと体験したものを語って伝えていかなければ、広島も長崎もなかったことになってしまう。絶対になかったことはさせたくない。生き残った者の、何かお役目じゃなからうか」

彼は「いつか被爆者が居なくなる日がくる、同じ過ちを繰り返さないために多くの人が、事実を知る必要がある」と言っていました。

その通り、隠さないで事実として知るべきです。新井さんは「誰が黙っておられるか。こんなことがあっていいか。皆さんにも一生懸命、語り継いでいただきたい、もうあとがない、時間がない。もはや我々ではない、貴方達に託す。」と言っておられました。世界は段々と危険な方向に向かっていないでしょうか。

新井さんは今回の被団協のノーベル賞は嬉しい事だが、一種の警告であると言われました。

新井さんは2015年、腎臓や前立腺のがんなどにより、急激に体調が悪化したそうです。これまで、6か所にがんを患い、手術を繰り返してきました。腎臓は今3分の1だそうです。

我々も多くの人に事実を知って欲しいと思います。私達「船橋市原爆被曝者の会」は、まったくイデオロギーや政党の影響がありません。伝えてゆくための資料等用意できると思います。

悲しみが多い中、小さな灯りがありました。

今回も折鶴が奉納されました。この古くなった折鶴を精製して新たな紙を再生していました。

工房で制作した千羽鶴再生紙グッズの販売業務も行っていました。

『すまいる☆スタジオ』は、障害者が自立を目指し訓練する場所であり、販売スタッフとしての接客も業務の一つです。

不思議だった奉納千羽鶴の行く末は、この方たちによって新たな命を得ていました。

今回、原爆の地広島に自らすすんで参加してくれた、5名の若者、本当に暑かった夏。

炎天下を歩きました。(3日間 計 42,755 歩) ご苦労様と言うと失礼になりそうな方々。

その目で見た広島体験、目を背けたくなりそうな資料をちゃんと見てくれました。

ぜひ、共に伝えていって欲しいと思います。

船橋市は昭和 61 年に「平和都市宣言」をしています、今日まで続けてきていることは、非常に誇れることであり、私たちみんなで守り続けなければなりません。

今日、この会場に昨年『長崎平和式典』に参加いただいた方たちもおいでです。

共に伝える先達でもあります。有難うございます。

ちなみに長崎では(3日間 計 42,940 歩)でした。200 歩ほど多く歩いていました。

私はこのような方々と一緒にさせていただき、『船橋市に目をそらさない、まっすぐ前が見れる若者たち』が居ることを誇りに思います。

ありがとう。

そして親御様こんなに素晴らしいお子さんに育て上げられた事、高く尊敬し感謝します。

本当にありがとうございます。

今が本当に平和かの確信はありません、しかし脅威は確実にあります。

核を廃絶の声をあげましょう。戦争の無い世界を目指しましょう。

～沖縄～



言葉や数では表せないということ

川上 美咲希（中学2年生）

先日、沖縄平和派遣において様々なことを学習してきました。そこで私が感じたこと、考えたことをまとめたいと思います。

まず、旧海軍司令部壕、糸数アブチラガマでは、中に入ると息苦しく、湿度が高いためここで生活していたら今にも体調が悪くなりそうだと思います。明かりを消すと真っ暗というより真っ黒といえるほどこの中で作業するなんて考えることもできないほどでした。しかし、そんな壕の中でも、当時は安全な場所であったという話も聞くことができ、当時の沖縄がどんな様子だったのか、当時の人々はどのような気持ちだったのか自分なりに想像することができました。

次に、対馬丸記念館では、語り部の方からなぜ対馬丸事件が起きてしまったのか、そして残された家族の思いなどを聞くことができました。当時、対馬丸以外にもたくさんの船が海の底へと沈んでしまったと知り、多くの人が亡くなり、その家族も当然たくさんいるのだと思いました。生きのびてほしくて子供を乗せたが、結果はこんなことになってしまっただけで残された人々はどんな気持ちなのだろうと思いました。「幻覚をみてしまってみんなでしがみついていたロープから手を離した子がいた。」語り部の方の講話の中で私が特に印象に残っている言葉です。隣にいた友達はどんな気持ちだったのか、私には考えられません。

そして、ひめゆり平和祈念資料館では、一人一人の写真がありました。ほほえんでいる人、少し緊張している人、中には写真がない人もいた。私はこの写真の中の1人1人に何かを伝えられた気がしました。

今回、この派遣事業で本当に貴重な体験をさせていただき、今でも思い出すと様々な思いが込み上げてきて涙が出てきます。戦争というのは言葉では表せないものを感じます。なので、1度は世界の多くの人があそこへ足を運び、全員が忘れることなく思いを受け継いでいくことが私たちの使命だと思います。



今ある当たり前

賞雅 如倫（中学3年生）

今回の沖縄派遣事業での体験は、今、私の目の前にある「当たり前」について深く考えさせられる貴重な時間となりました。

出発前、平和派遣者としての自覚と責任を抱き飛行機に搭乗したつもりでいました。しかし、今振り返ると、その時の私は「初めての沖縄、飛行機」にどこか浮かれている気持ちがあったのだと思います。機窓に見える青い空、真っ白な雲を写真に収め、御当地メニューの昼ご飯を前に、ちょっとした観光気分になっていました。

しかし、その後、各訪問地で生々しい戦争体験のお話を聞き、多くの現実が収まった資料を目の当たりにしていく中で、私の目前に広がる沖縄の空は色を変えていきました。食事の際は味覚を失ったような、そんな気持ちへと変化していきました。

訪問した中で特に衝撃的だったのは「糸数アブチラガマ」「ひめゆり平和祈念資料館」でした。

「ガマ」の中でのお話は強烈に私の心に残っています。

「トイレは鍋に大小構わずする。鍋がいっぱいになったら、18 リットル入る大きな缶にうつして、夜になったら捨てに行く。転んで全身かぶる事もあった。

毎日たくさんの方が死んでいく。その始末を学徒隊がした。まだ、熱を帯びている死体に土をかぶせていく。切断された手足を処理する。最初は血を見ただけでも吐き気がし、ぎゃあぎゃあ騒いでいたのに、途中からは何も感じられなくなっていた。

破傷風感染者は真っ暗なガマの中亡くなっていった。脳の病気にかかった人のことをうらやんだ。脳が狂い感覚がない人は痛みや苦しみを味合わずに済んだはずだからと。

アメリカ軍が攻めてきたとき、動ける人はガマから脱出できたものの、医者から「無理だ」と診断された人は、ガマに置き去りにされた。あたりは真っ暗だった。しかし、逆にそれが良かったという。なぜなら、傷にわいた蛆虫（傷口に蛆虫がわきすぎて、蛆虫が傷口を食べる音が聞こえてきたという。）を見

なくて済んだからだそうだ。

ガマで一番つらい生活を強いられたのは赤ちゃんのいる母親だった。赤ちゃんが少しでも泣けば、『出てけ』と言われた」

正直、現実私の想像を遥かに超えていました。

お話の中に「生き残った人たちは『あの時、自分たちは人間じゃなかった』と言っていた。」という言葉がありました。もし「地獄」があるなら、このような世界なのではないかと思う程、まさに、「人間の世界」ではなかったと思います。

また、戦争の被害者は「死者数」だけではありませんでした。戦争で生き残り、戦争で経験したことを伝えている人も、心の中で「自分達も加害者だ。仲間を見捨ててしまった。置き去りにしてしまった。」と苦しんできたそうです。

ガマにいた頃、何人かの兵士から「形見を受け取ってくれ」と言われたが「どうせ自分も死ぬから無理だ」と断っていたそうです。しかし「生きてしまった」という思いで、戦後にガマを訪れ、手を合わせずっと「申し訳なかった」と言っていたそうです。

戦争の苦しみは戦中だけでなく、その後も人々の心を支配してきたのだと思いました。「生きた」ことがまるで悪、罪のような闇を残しました。

「ひめゆり平和祈念資料館」には、ひめゆり学徒隊の生徒たちの戦前の様子、太平洋戦争開始から学徒隊が結成されるまでの様子、そして、ひめゆり学徒隊として沖縄の陸軍病院活動しているときの様子などが展示されていました。

ひめゆり学徒隊とは沖縄戦当時、沖縄師範学校女子部と沖縄県第一高等女学校の生徒たちが、沖縄陸軍病院に看護要員として動員された部隊のことです。年齢は14才から19才。ちょうど、私と同じくらいの年頃の女の子です。

女学校には家の事情等で様々な年齢の少女がいました。その中で、一緒に部活をしたり、みんなで勉強したり、先生の特徴をつかんであだ名をつけ、生徒たちの会話の中で密かに使ったりなど、現代の私達とはあまり変わらない少女たちでした。

しかし、戦争が始まると生徒たちの生活は一変しました。制服だったセーラー服は布を多く使う部分を廃止し、今まで自由だった髪型は学年ごとに指定されるようになりました。授業では戦争に勝ち抜くための鍛錬が重視されはじめ、生徒たちは決戦下での生徒であることの自覚を求められました。敵の文化を排除するため、英語の授業がなくなりました。そして、勤労奉仕や節約が当たり前になっていきました。生徒たちはだんだん「戦争に勝つために国に尽くすべきだ」と考えるようになりました。

最後の1年、校舎の一部は軍に提供されました。県外疎開が始まり、空襲で家を失う生徒がたくさん出て、落ち着かない日々の中、実習や試験が行われたと言います。そして、陸上戦に向けた看護教育が始まっていきました。1945年3月23日、深夜に集まった生徒を前に校長：西岡一義は「素平の訓練の効果を発揮して、御国にご奉仕すべき時が来た。ひめゆり学徒の本領を発揮して、皇国のために戦ってもらいたい」と言いました。その後、生徒たちは5キロ離れた南風原の沖縄陸軍病院に向かいました。

それから少女たちの生活は悲惨なものでした。粗末な二段ベッドが並ぶ病院は、じめじめしていて暑く、むせるほどの悪臭で、患者のうめき声や叫び声が絶えず、水欲しさに尿を飲む人、痛みや空腹で当たり散らす人、傷口のウジ虫を訴える人、脳症の幻覚で暴れる人、多くの人は次々と死んでいったと言います。そんな中、患者の世話他、水くみ、排せつ物の処理、飯上げ、死体埋葬なども少女たちの仕事でした。中には弾が飛んでくる外にでなければ危険な仕事もあった。少女たちは病院が攻撃されることはないと思っていたのに、現実には砲弾の飛び交う戦場だったそうです。

これだけのことを強いられる日々、生徒の食はピンポン玉サイズのおにぎり1個ほどだったそうです。横になれず、壁にもたれて仮眠していると、患者に呼ばれる。食べ物も食もなく、生理も便もほとんどなくなり、服や頭にシラミがわいた状態。青白くやせ細り、高熱に襲われ倒れる者もいたそうです。

「これが戦争なんだ」

想像を超えた世界を目の前に、私は言葉を失いました。この現実を今の私達がどれだけ想像できるでしょうか。正直、できないと思いました。

現在、私たちの生活は脅かされるほどの強制や制限を国から強いられることはほとんどありません。国に支配されていると感じることもありません。多くの人には自由が与えられ、衣食住も命も教育も守られています。そして今の時代に生きる私達はこれを「当たり前」だと思っています。そんな私達にどれだけ戦争の苦しみを理解できるでしょうか。

次元の違う世界を目の前にして、私が強く感じたことは、今日の前にある「当たり前」は決して「当たり前」ではないのだということでした。なぜなら、私たちの目の前にある景色は、日常は「守られてきたもの」だからです。

タクシーの運転手大城さんが話してくれた内容は次のようなものでした。

大城さんのお母さんは戦争経験者でした。しかし、大城さんのお母さんから戦争の経験を聞いたのは大きくなってからだそうです。戦時中、大城さんのお母さんは小学校6年生くらいでした。妹を引っ張って必死に逃げたそうです。

壕で生まれた一番下の妹は生まれてすぐに亡くなりました。

戦争が終わってもアメリカ軍の捕虜にされ、辛い日々が続きました。

お母さんはそんな体験を伝えたくもなかったそうです。

人間の世界を失い、人間でなくなった戦争体験者の方々は、おそらく皆さんその苦しみや悲しみから解放されるために、全てを「無」にしたかったに違いありません。

それほど壮絶な悲惨体験をされたのです。

それを思い出し、語り継ぐことが、どれだけつらいことか、大城さんのお話を聞きわかりました。

それでも、今もこうして、私達に戦争体験を伝え続けてくれているのは、私たちの未来を守るためだと思いました。

今の世の中があるのは、戦争を経験し、戦争の悲惨さを味わった方々が、この 80 年間、思い出したくもないつらい経験を未来のために残してくれたものなのです。

私達は授業のみならず、資料やインターネット、アニメなど、様々な場面で戦争について学ぶ機会がありました。「戦争は悲惨で残酷なもの」「決して繰り返してはならないもの」と理解したつもりでいました。しかし、実際は過去の出来事を想像するだけに過ぎず、どこか非現実的な、どこか他人事のような感覚で、何も理解していなかったのだと気づかされました。

この平和な世の中が訪れるまでに、現代の私達では想像もつかないような悲惨な世の中があることを私たちは忘れてはいけません。今ある平和は決して当たり前ではない、そのことを私たちは理解していかなければならないのです。

そして、そのために、辛い過去を伝え続けてきてくれた人々の存在を決して忘れてはいけません。そう強く感じました

「黒い雨」が降ったこの空に青空を取り戻し、その空を今の私達のために守り続けてきてくれた人が居る。私達はその尊い存在に、まず気づき、感謝しなければなりません。

そして、今ある平和をこれから先の未来へ繋いでいくために、戦争体験者ではない私達も、戦争について伝えること、理解すること、考えることをしなくてはなりません。

その中には、ただ、戦争の悲惨さを伝えることだけではないと私は思います。

一人ひとりが「今」や「身近な事、些細な事」をも大切にすることだと思います。

日々の生活、仕事、学校、友達、家族、すれ違う人々…小さな「当たり前」一つ一つが貴重であり、平和の種として、根をはり未来に向かって伸びていく

と思います。

私は、「まず私がすべきこと」として、この事業で学んだことを自分の周りにいる人に伝えていきたいです。そして、伝えるだけでなく、今ある平和を守るために自分ができること考えて、どんな小さなことでも、大切なこととして一生懸命取り組んでいきたいと考えています。

今回の体験は私にとって、とても貴重な経験となりました。本当にありがとうございました。

帰路の機中、窓の向こうに広がる青い空は、行路で見たそれよりさらに青く、尊いものに感じました。



渡されたバトン

井上 優（中学2年生）

「死んでいる人がうらやましかった」

これは、糸数アブチラガマにいたひめゆり学徒隊の方が言った言葉だそうです。3日間の沖縄派遣で最も衝撃的な言葉でした。生まれたときから平和な時代を生きている私には想像もできないような言葉で、信じられませんでした。

今回私が沖縄の戦争跡地を巡っていく中で一番印象に残ったのは、糸数アブチラガマです。糸数アブチラガマとは、沖縄戦の時、病院の分室や住宅地として使われた、沖縄南部の糸数地域にある深い洞窟です。私はガマを目の前にした時、入るのが怖いと思いました。入口が狭く真っ暗だったからです。実際に入ってみると、中は広くなっていましたが、足場の安定しない地面、懐中電灯がなければ何も見えないほど真っ暗な空間、住むことが想像できないような場所でした。当時は、ろうそくの明かりと小さな空気孔からの光だけの暗いガマの中を、薬品箱を持って軍医や看護師、ひめゆり学徒隊の方々が負傷兵の治療や看護をしていたそうです。ガマが地上よりも安全なところだったため、みんな入りたがったと聞きました。しかし実際は、死体が積み重なり、そばには死を待つだけの人が横たわっていて、壮絶な現場だったそうです。冒頭の言葉が物語るように、常に死と隣り合わせの毎日で、生きているのが辛いと思うほど、ガマでの時間は想像を絶するほど過酷なものだったのだろうと感じました。

沖縄平和派遣事業に参加して、私は初めて戦争の残酷さを目の当たりにしました。そして、私にとっての当たり前は、戦争中誰もが望んでいたことなのだと気付きました。戦後80年となる現在、実際に戦争を経験した方が辛い記憶を通して、平和の大切さを伝えてくださっています。今ある平和は過去に戦争で犠牲になった方々の上に成り立っています。私たちはその尊い平和を守り、後世に伝えていかなければなりません。渡されたバトンをつないでいくために。



平和な世の中をつくっていくためには

頓所 寛己（中学2年生）

沖縄平和派遣事業を通して沖縄戦について詳しく学びました。

沖縄戦について強く印象に残ったのは三つです。

一つ目は「沖縄戦では多くの人が被害者であると同時に加害者である」ということです。僕はこの沖縄平和派遣事業で沖縄戦について詳しく学ぶまでは、米軍が加害者で沖縄県民や日本兵が被害者であると思っていました。しかし、実際に沖縄戦を経験した人は皆自分も加害者だと思っていることを知りました。沖縄戦では皆生き抜くことに精一杯であったため自分で歩けない人などを壕の中に置いていき、逃げたという方が数多くいたそうです。仲間を置いて逃げてしまったため、置いて逃げた人は置いて行った人を自分が殺したと思っているということがわかりました。沖縄戦を経験した人は沖縄戦についてあまり語らないと聞いていました。仲間を置いて行ってしまったという罪悪感があったため語りたくなかったのだと思いました。

二つ目は子供の犠牲がとて多かったということです。沖縄戦では数多くの学徒隊、少年兵、疎開児童が犠牲となりました。一番有名な学徒隊はひめゆり学徒隊です。ひめゆり学徒隊は二つの学校の女子生徒により形成されており、戦時下では病人の介護や兵士へ食料を渡すなどを行っていました。ひめゆり学徒隊は、解散命令が出されてからの被害がとて多く、およそ二人に一人が犠牲となりました。少年兵は、兵力不足により数多く動員されました。戦場では「捨て石」とされており特攻作戦により数多くの犠牲が出ました。対馬丸事件では、疎開児童が多く乗った船がアメリカの魚雷攻撃により沈没し、犠牲が増えました。沖縄戦では子供の犠牲がとて多く、学徒隊は沖縄戦の負の象徴のように感じました。

三つ目は「米軍に捕まったら殺される」という日本による洗脳です。当時の教育は、軍国主義をもとに教育されていたため、敵国である米軍に捕まったら確実に生きることができないと思っていたそうです。米軍が沖縄本土へ上陸したときに、沖縄県民や日本軍の拠点は地上の建物ではなく、地下にある自然ガ

マや壕へ避難しました。しかし、米軍の侵攻が続くにつれて南部に避難していききました。戦場が南部に南下していくと、避難していた壕やガマの場所が見つかってしまいました。糸数アブチラガマでは、米軍兵が「大人しく投降したら命を助けてやる」と勧告しましたが、日本兵は日本からの洗脳により、沖縄県民に投降を辞めさせ逃げられないように銃口を向け、監視をしました。米軍兵は勧告しましたが、壕内にいる日本兵はこの要求に応じず壕内に引きこまりました。米軍兵は投降させるのを諦め、火炎放射器で出入り口を塞ぎました。その影響により、壕内で多大な負傷者を出してしまいました。また、米軍兵に捕まることを恐れ手榴弾で自決を選択した人が数多くいました。日本兵で手榴弾を持っていなかった人は沖縄県民から奪い、その手榴弾で自決をしました。自決をしなかった人は、その後米軍に捕まりましたが殺されず、尋問により一般住民と兵士に分けられました。収容所では外よりかは比較的安全だったと言われており、外では空襲や砲撃に巻き込まれいつ命を落とすかわからないという恐怖がありましたが、収容所では米軍に管理されていたため安全な場所でした。しかし、収容所では精神的な苦痛が多かったそうです。その後収容所から解放されましたが、沖縄は米軍の支配下となっており、理不尽な事件が数多くありました。沖縄戦が終わった後でも、沖縄県民は精神的な苦痛が続いていることがわかりました。沖縄戦で多大な犠牲者が出たのは、侵攻を続けた米軍と日本兵を捨て駒のように扱い、洗脳をした日本が原因なのではないかと思いました。

沖縄戦についての資料館へ行くと、「命どう宝」という言葉をよく見かけました。この言葉は、沖縄の方言で「命こそ宝」という意味だそうです。この言葉を平和学習の際に教えることで、「もう二度と戦争が起きない平和な世界になってほしい」という願いが込められてできたそうです。その他にも沖縄の教訓を伝える「平和の要石」という言葉があります。この言葉を通して世界に発信されています。

今年で終戦 80 年を迎えます。僕はこの平和派遣事業に参加するまでは、歴史上の一つの出来事として考えていました。しかし、実際に足を運び学んできてからは、戦争とは最近まで起きていたことなのだとわかりました。80 年も前のことだと思う人もいるかもしれませんが、戦争が終わってもその後も戦争により苦しんだ人は数多くいます。今もなお世界中で戦争が起こっています。私たちが過去に日本が関係している戦争や世界中で起きている戦争を他人事

として捉えるのではなく自分事として捉えていくことが、戦争のない平和な世の中をつくっていくのに大切だと思います。



数字の裏にあった命の重み

山崎 芽衣（中学1年生）

「犠牲者は数字ではなく人で、全員に顔があった」

この言葉は、糸数アブチラガマを案内してくれた方の一言です。この言葉に私は強く心を動かされました。

テレビやインターネットで犠牲者や負傷者の「人数」ばかりを目にしていた私は、今までその数字の裏にいる“人”の姿を想像することがほとんどなかったことに気づかされました。

それと同時に、約80年前の沖縄戦で、この糸数アブチラガマという場所で、私たちと同じくらいの年齢の人たちが遺体の処理や怪我人の手術など、想像を絶する体験をさせられていたという現実を目の当たりにしました。戦争がなければ、彼らも今の私たちと同じように学校生活を送り、友達と笑い合っていたはずです。しかし、戦争によって“当たり前”が簡単に壊されてしまった——そのことを、実際に戦争が行われた沖縄の地で改めて実感しました。

特に衝撃を受けたのは、沖縄戦では正規の軍人よりもはるかに多くの一般住民が犠牲になっていたという事実です。沖縄の方言を話すことでスパイと疑われ、拷問や虐殺を受けたり、泣き止まない乳幼児がいるためにガマ（自然洞窟）を追い出されたり、米軍による無差別な砲撃で命を落とすなど、当時の住民たちがどれほど過酷な状況に置かれていたのかを知り、恐怖を感じました。

今回の平和学習に参加して、実際にガマの中に入り、写真や文章では伝わりきらない当時の人々の気持ちに少しでも触れられたような気がします。これまで「戦争はよくない」と漠然と思っていた私ですが、今回の体験を通じて、「戦争は絶対に起きてはいけないこと」だと心から強く思いました。

少しでも戦争や平和に興味がある人は、ぜひ現地に足を運んで、自分の目と心で、80年前の現実を想像してみてください。

《事前説明会の様子 令和7年7月23日》



派遣者計11名が初めて顔を合わせました。

派遣者の自己紹介や派遣への応募動機を發表してもらい、役割分担を決めました。

《市長報告会の様子 令和7年8月21日》



派遣者から、現地で感じたこと、これから「平和の尊さ」を多くの人に広めていきたいという決意などを市長に報告しました。現地で学んできたことなど、市長からの質問を交えながら、平和について話し合いました。報告会の後、派遣者同士で、今回の派遣事業を通し、具体的にどのようなことを伝えていきたいか話し合い、模造紙にまとめました。



《広島 平和記念式典 報告》

1. 式典の概要・様子

広島平和式典は、毎年8月6日の早朝に行われる、広島の原爆による被爆者の霊を悼む式典です。原爆投下から80年を迎えた、今年の8月6日もとても暑い日でした。空は晴れわたり、日差しがとても強く、セミがうるさいほど鳴いていました。私たちは少し早めに平和記念公園に到着し、整然と並べられた椅子の前の方に座って、開会を待っていました。平和記念公園は、80年前に近くに原爆が落ちたことが信じられないほど、緑豊かな美しい公園でした。開会前の式典会場は、海外の放送局や地域の中学校の管弦楽部がおり、ざわざわとした雰囲気でした。ところが、管弦楽部の音楽と同時に式典が始まると、一瞬で場の空気が変わり、厳かな雰囲気に包まれました。私はこの変化にとっても驚き、背筋がピンと伸びました。

はじめに、被爆者名簿に、今年亡くなられた被爆者の方々の名前が加えられました。今年だけで、4000人を超える方が亡くなられたと知り、またこれだけ多くの戦争を知る方がいなくなってしまったことに焦りを覚えました。

次に献花が行われました。内閣総理大臣や外国の要職の方々、広島市内の小中学生、被爆者の遺族まで、同じ足取りで、順番に花を手向けていました。そして平和の鐘が鳴り、黙とうが行われました。私自身も目をつむって下を向きました。前日に、ガイドさんに原爆について詳しく教えてもらっていたにも関わらず、その時は何を願えばいいかわからず、ありふれた言葉ばかりになってしまいましたが、それでも、邪念を一切取り払い、ただひたすら平和について心の中で祈りました。

その後、地元の小学生2人が、年下とは思えないくらいしっかりとした口調で平和宣言をし、何十羽の鳩を一斉に離しました。緑の木々と青い空に向かって、白や灰色の鳩が等間隔で空に羽ばたく様子はとても美しく、「まさに平和の象徴だ」と感じました。それが終わると、地域の小学生を筆頭に、内閣総理大臣や広島的首長などが、次々と平和に対する思いや、願いについて話をしました。皆さんの使う言葉は違っても、平和に対する思いは同じだと感じました。

2. 感想

今回の式典に出席して、資料や教科書など、活字を追うだけではわからない、戦争の重さを実感することができました。気温の高い日ではありましたが、参列してみると、暑さを感じないほど会場の空気は厳かで、参列者一人一人が真剣に平和について考えていました。年代も立場も人種も超えた一体感があり、

みんなが「過去の過ちを受け止めて、未来には絶対に同じ過ちを繰り返さない」という強い願いを感じました。

ここに参加させていただいたからには、一人でも多くの人に「まずは広島に足を運んでほしい」と伝えたいです。私自身もそうでしたが、今の日本人の多くは、戦争を頭では理解していても、心のどこかで「自分ごと」ではなく、客観的に「遠くの外国で起きていること」と捉えてしまっていると思います。言葉だけでは伝えられる情報は限られてしまうので、ぜひ広島で自分の目や耳など体を使って、戦争を感じてほしいと思います。

《沖縄 対馬丸記念館 語り部講話》

1. 概要

対馬丸講話では、叔父が実際に乗っていたという遺族の方から、対馬丸事件が起きるきっかけとなった出来事や対馬丸事件、そしてその後の疎開児童の苦しみ、残された家族の思い等を話していただきました。

2. 講話の内容

対馬丸事件とは、1944 年(昭和 19 年)8 月 22 日 22 時 12 分頃、鹿児島県トカラ列島悪石島付近で、疎開船「対馬丸」がアメリカ軍の潜水艦ボーフィン号の魚雷攻撃を受け沈没した事件です。この対馬丸事件は、1944 年に日本軍が占拠していたサイパンがアメリカ軍に取られてしまい、沖縄知事は次の戦争が沖縄県で起こると予想し、沖縄県を人が住む場所から戦場と変えるために疎開命令を出しました。対象は小学 3 年生から 6 年生までの男子の希望者でしたが、出航前には女子や老人も対象になりました。7 月時点で、すでに本土へ約 8 万人、台湾に約 2 万人の計 10 万人もの人が疎開しました。対馬丸で疎開する生徒を一人でも増やすために、学校の担任の先生や校長先生が保護者に直接説得に行きました。このとき対馬丸は「軍艦で護衛船もつく」と説明があったため子供を疎開させるという決断をした人が多かったそうです。しかし、実際出航の時に対馬丸が軍艦ではなく、貨物船ということを知り、子供を疎開させない親も何人かはいたそうです。この時、疎開する児童は親と離れる寂しさと、本土へ行くことにより雪や汽車を見られる喜びで複雑な気持ちだったそうです。

疎開船は対馬丸を含め 3 隻と護衛船 2 隻で本土に向け、8 月 21 日に出航しました。船内の明かりは豆電球のみで、救命胴衣を着用して睡眠をとるという生活に疎開児童はとても不安だったそうです。出航して 2 日目の 22 時 12 分に、沖縄県那覇港を出る前から対馬丸を尾行していた潜水艦ボーフィン号からの魚雷攻撃を受けました。このときはほとんどの疎開児童が寝ており、避難に遅れて溺れてしまう人が数多くいたそうです。対馬丸は 4 分で傾き、そして沈没してしまいました。対馬丸に乗っていた人は避難用のいかだに乗り移り、ほかの 4 隻に助けを求めましたが置いていかれてしまったそうです。夏の夜の台風により波が荒れているため、いかだに乗っていた疎開児童や大人は必死にしがみつきましたが、流されてしまう人がたくさんいたそうです。実際に対馬丸に乗っていた方の証言によると、体力を消耗しすぎて幻覚を見てしまい海へ入ってしまう人がいたり、いかだに乗るための争いにより海に落ちてしまったりなど、たくさんの方が溺れて亡くなってしまったそうです。そして、いかだに乗

って奄美大島に着いたのは、遭難してから約6日後のことでした。奄美大島の住民にけがの手当てや食事を与えてもらったそうです。漂着してきた遺体は丁寧に埋葬されました。疎開児童はそのまま本土へ向かうグループと沖縄へ帰るグループに分かれて、それぞれ目的地に行きました。日本軍は対馬丸事件のことを世間に知られたくないために箝口令を出し、対馬丸事件について話せないようにしました。沖縄に戻った疎開児童はこの箝口令により、親や対馬丸事件で亡くした友達の親に何も言えずにとっても苦しみました。その後沖縄では十・十空襲や地上戦などの沖縄戦といわれる戦争が起きました。沖縄戦守備軍である32軍にも箝口令が出され、身近の人の安否すら聞けないという状態が続きました。その後戦争が終わり、無人深海探査機「ドルフィン 3K」が対馬丸を発見しましたが、状態がとても悪く、引き上げることができずに今も悪石島近辺に沈んでいます。

3. 感想

この話を聞いて私は「人々が苦しめられたのは事件よりも箝口令だったのでは」と思いました。対馬丸に乗っていた人々には箝口令が出されました。そのため、沖縄に帰っても家族には事件のことを話せない、亡くした友達の家族に友達のことを話せないというつらい出来事が起こりました。亡くした友達のことを話せないため、話してもらえない人からは罵声が浴びせられました。この箝口令が出されたため自分で抱え込まないといけません。他にも32軍に箝口令が出され、隊員は仲間の安否すら聞けない状態でした。そのため、箝口令により、全てを背負わないといけないという絶望感が大きかったのだと思いました。実際、対馬丸事件の前にも疎開船が敵国の攻撃により沈んでしまい、箝口令が出されるという出来事がありました。箝口令が出されていなかったら対馬丸の前にも同じような事件があったと知ることができ、対馬丸事件が起きなかったかもしれません。しかし、箝口令が出されたからこそ、県民の混乱が少なくなったとも思います。

私たちは戦争体験者の生の声を聞くことが難しくなっています。そのため、講話により戦争について語り継いでくれている方のお話や実際に学ぶことがとても大切だと思います。私たちは戦争を知り、伝えていく役目があるのだと気づきました。戦争を学んだら身近な人に話すことでアウトプットされ、整理ができます。このような会話の輪を身近なところから少しずつでもいいので大きくしていき、最終的には世界まで戦争について語り合えるようになれば、戦争のない平和な世界が生まれると思います。

《令和7年広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式 式次第》

日時： 令和7年8月6日（水）8時00分 開式

場所： 平和記念公園

08:00 開式

08:00 原爆死没者名簿奉納

08:03 式辞

08:08 献花

08:15 黙とう・平和の鐘

08:16 平和宣言

放鳩

08:24 平和の誓い

08:29 あいさつ

08:46 ひろしま平和の歌

08:50 閉式

《広島平和宣言》

今から 80 年前、男女の区別もつかぬ遺体であふれかえっていたこの広島で、体中にガラスの破片が突き刺さる傷を負いながらも、自らの手により父を茶毘に付した被爆者がいました。「死んでもいいから水を飲ませて下さい！」と声を振り絞る少女に水をあげなかったことを悔やみ、核兵器廃絶を叫び続けることが原爆犠牲者へのせめてもの償いだと自分に言い聞かせる被爆者。原爆に遭っていることを理由に相手の親から結婚を反対され、独身のまま生涯を終えた被爆者もいました。

そして核兵器のない平和な世界を創るためには、たとえ自分の意見と反対の人がいてもまずは話をしてみることが大事であり、決してあきらめない「ネバーギブアップ」の精神を若い世代へ伝え続けた被爆者。こうした被爆者の体験に基づく貴重な平和への思いを伝えていくことが、ますます大切になっています。

しかしながら、米国とロシアが世界の核弾頭の約 9 割を保有し続け、またロシアによるウクライナ侵攻や混乱を極める中東情勢を背景に、世界中で軍備増強の動きが加速しています。各国の為政者の中では、こうした現状に強くとらわれ、「自国を守るためには、核兵器の保有もやむを得ない。」という考え方が強まりつつあります。こうした事態は、国際社会が過去の悲惨な歴史から得た教訓を無にすると同時に、これまで築き上げてきた平和構築のための枠組みを大きく揺るがすものです。

このような国家が中心となる世界情勢にあっても、私たち市民は決してあきらめることなく、真に平和な世界の実現に向けて、核兵器廃絶への思いを市民社会の総意にしていかなければなりません。そのために、次代を担う若い世代には、軍事費や安全保障、さらには核兵器のあり方は、自分たちの将来に非人道的な結末をもたらす得る課題であることを自覚していただきたい。その上で、市民社会の総意を形成するための活動を先導し、市民レベルの取組の輪を広げてほしいのです。その際心に留めておくべきことは、自分よりも他者の立場を重視する考え方を優先することが大切であり、そうすることで人類は多くの混

乱や紛争を解決し、現在に至っているということです。こうしたことを踏まえれば、国家は自国のことのみに専念して他国を無視してはならないということです。

また、市民レベルの取組の輪を広げる際には、連帯が不可欠となることから、「平和文化」の振興にもつながる文化芸術活動やスポーツを通じた交流などを活性化していくことが重要になります。とりわけ若い世代が先導する「平和文化」の振興とは、決して難しいことではなく、例えば、平和をテーマとした絵の制作や音楽活動に参加する、あるいは被爆樹木の種や二世の苗木を育てるなど、自分たちが日々の生活の中でできることを見つけ、行動することです。広島市は、皆さんが「平和文化」に触れることのできる場を提供し続けます。そして、被爆者を始め先人の助け合いの精神を基に創り上げられた「平和文化」が国境を越えて広がっていけば、必ずや核抑止力に依存する為政者の政策転換を促すことになります。

世界中の為政者の皆さん。自国のことのみに専念する安全保障政策そのものが国と国との争いを生み出すものになってはいないでしょうか。核兵器を含む軍事力の強化を進める国こそ、核兵器に依存しないための建設的な議論をする責任があるのではないですか。世界中の為政者の皆さん。広島を訪れ、被爆の実相を自ら確かめてください。平和を願う「ヒロシマの心」を理解し、対話を通じた信頼関係に基づく安全保障体制の構築に向けた議論をすぐにでも開始すべきではないですか。

日本政府には、唯一の戦争被爆国として、また恒久平和を念願する国民の代表として、国際社会の分断解消に向け主導的な役割を果たしていただきたい。広島市は、世界最大の平和都市のネットワークへと発展し、更なる拡大を目指す平和首長会議の会長都市として、世界の8,500を超える加盟都市と連帯し、武力の対極にある「平和文化」を世界中に根付かせることで、為政者の政策転換を促していきます。核兵器禁止条約の締約国となることは、ノーベル平和賞を受賞した日本原水爆被害者団体協議会を含む被爆者の願いに応え、「ヒロシマの心」を体現することにほかなりません。また、核兵器禁止条約は、機能不全

に陥りかねないNPT(核兵器不拡散条約)が国際的な核軍縮・不拡散体制の礎石として有効に機能するための後ろ盾になるはずです。是非とも来年開催される核兵器禁止条約の第1回再検討会議にオブザーバー参加していただきたい。また、核実験による放射線被害への地球規模での対応が課題となっている中、平均年齢が86歳を超え、心身に悪影響を及ぼす放射線により、様々な苦しみを抱える多くの被爆者の苦悩にしっかりと寄り添い、在外被爆者を含む被爆者支援策を充実することを強く求めます。

本日、被爆80周年の平和記念式典に当たり、原爆犠牲者の御霊に心から哀悼の誠を捧げるとともに、決意を新たに、人類の悲願である核兵器廃絶とその先にある世界恒久平和の実現に向け、被爆地長崎、そして思いを同じくする世界の人々と共に、これからも力を尽くすことを誓います。

令和7年(2025年)8月6日

広島市長 松井 一實

令和7年度

広島・沖縄平和派遣者報告書

令和7年12月発行

船橋市総務部総務法制課

Tel 047-436-2122

e-mail shisomu@city.funabashi.lg.jp